

ン言語となって、重要性を増しているからである。

今年の春から、私は慎重に英検2級から始め、1次・2次とも無事に合格した。独検1級のうえ英検2級もとったので、嬉しくなつてついつい人に話したところ、2級は高校生でも取れると、軽蔑的に批評されてがっかりした。そこで秋からは準1級に挑戦したいと思っている。

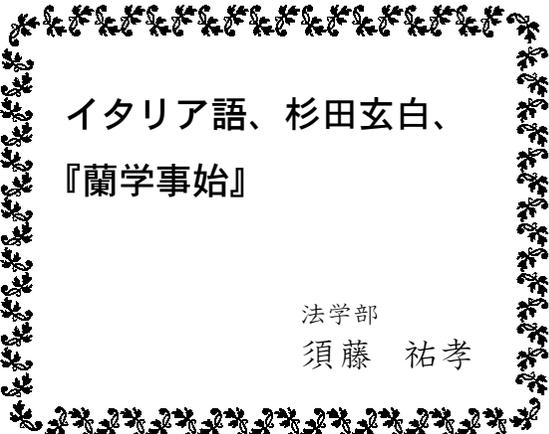
このように、最近3年間、私は2ヵ国語の検定試験を半分は使命感から、半分は楽しみながら受けまくった。その結果いろいろ感得したことがあるが、そのうち参考になるかもしれないと思うことを幾つかあげておきたい。

まず第一は、「若い頃に習得した知識と能力は一生の宝」との諺どおり、私のように高齢のものには、かつて習得したものを思い出すのが精一杯であつて、それを新たに伸ばすには非常に苦勞が多いということだ。これはすべての知識や能力について言えることではあるが、とくに外国語についてそうである。だからそれは、ぜひ若いうちにマスターしていただきたい。

第二に、外国語検定の場合、学生のなかには、私のゼミ生にもそのような者がいたが、いっきよに高い水準を目指して、何度も失敗しながら、ついに合格する人もいる。だが、私の経験では、力に応じたところから始めて、一つ一つ高みに登っていく方がよいように思う。そうすれば、基礎的なものから高次なものへと着実に能力を伸ばせるし、自信をもって検定を受けることが楽しみにもなる。

第三は、とくに欧米の言語は構造的に日本語と非常に異なるため、私たちにとってリスニングがいちばん難しいということだ。そしてその困難は、1~2年留学したからといって自然に解消するわけでもない。一連の意味をもった言葉が、一連の音の流れと対応して理解できるためには、テキストを読みながら、市販のカセットやCD、またはLL教室のAV機器を用いて、独自に繰り返し訓練する必要がある。相手の言うことが分かれば、外国語はすでに半分、習得したも同然である。この

リスニング能力は、若い時ほどスムーズに上達するので、ぜひ、この点で努力するよう心がけてほしい。



イタリア語、杉田玄白、 『蘭学事始』

法学部

須藤 祐孝

イタリア語を学ぶ気などまったくなかった。それが、今や、一番親しむ外国語で一番苦勞する外国語がイタリア語という具合になってしまっている。そのきっかけは、まことにあっさりとしたものだった。

大学院マスター・コースの終わり近く、指導教授から、有り難いことに、助手として本格的な研究者の道を進むよう勧めていただいた。同時に、これまで関心を持ってきたマキアヴェッリをこれからさらに本格的に研究していくなら、作品を原語で読まなければならないね、と穏やかな忠告をいただいた。その通りだと思ったので、私も穏やかに、はい、と答えた。その後すぐ始まる大苦戦など、まったく想像もしなかった。

それまで見ていた我が国のマキアヴェッリ研究のほとんどが、さらには彼の時代のルネサンス研究すらもが、ドイツの翻訳、研究に依存しそれに基づいたものであることに疑問と不満を覚えていた。だから、マキアヴェッリの作品を原語で読まねばならないという指導教授の言葉に、そうだその通りだ、さすが先生はいいことを言うなと生意気な感想を抱きながら、あっさり応じたのだ。その原語すなわちイタリア語のジャングルに迷い込

むことになる自分の姿など、まったく想い浮かばなかった。

さっそく本屋に行ってみた。今と比べると想像できないかもしれない。当時は、ちょっとした本屋にイタリア語関係のものなど何もなかった。大きな本屋に行っても、小さな辞書と小さな、簡単な文法書が見つかった。この程度のもので専門書を原語で読めるようになれるだろうかと不安に思い、さらに探した。中型の辞書と文法書を見つけて求めた。さっそく読み始めた。しかしどうにもよく分からない。どうしたらいいだろう？ そうだ、まず発音を少し覚えよう。文法書に出ている単語が発音できるようになれば少しは文法の勉強にはずみがつくかもしれない。誰か発音を教えてくれる人、イタリア語を知ってる人が居ないだろうか？

そう思って初めて分かった。私の居た大学には無論、大学が在った仙台にも、イタリア語の先生は居なかったのだ。少なくとも私の知る範囲には居なかった。色々な人に聞いてみたけれど、皆、知らないということだった。代わりにと、ある人がリンガフォンの外国語レコードにイタリア語もあると教えてくれた。さっそく入手した。当時はカセットテープというものが無かったから、外国語の発音はすべてレコードに頼らねばならなかった。十数枚のレコードを聴くための機器は、大学のものを借りて、それでテープにすべて録音した。テープはリールに巻かれた大型のもので、これをかけるテープコーダーは知り合いから古物を安くゆずってもらった。やっとこさ持ち歩ける重いもので、当時はそういう大型のものしかなかったのだ。しかも、珍しい貴重品だった。

とにかく何とか発音を聴けるようになった。アルファベットの音を初めて聴いた。テキストを見ながら単語の発音を聴き、このZはここではツと発音するのにこっちはツなんだなあというように文字通り一語一語、覚え始めた。それでも、生の音を聴いただけで楽しくなった。平行して、多様な動詞の時制や格の変化などは、小さなカードに書いて持ち歩き、バスの中でもどこでも暗記

と発音の練習を試みた。目で単語を追うだけより、音を伴った勉強は格段に楽しかった。だから、イタリアの映画『道』の中心部分のレコードとテキストが発売されていると知って、さっそく求め、やはりリール式のテープに録音して聴いた。何度も聴いた。だがこちらは、セリフの難しさ、発音の速さのためにまだほとんど聞き取れなかった。しかし、哀切な音楽と主演男優・女優の会話のムードがたとえようもなくよかった。イタリア語ってなんかすごくいいなあ、と思えた。もう男優も女優も亡くなったらしいけれど、あの二人の『道』は、私には、どんな名画にもまさって記憶に残る生涯の映画である。

一方、文法書(当時の岩波全書の一冊)の理解は進まなかった。二回三回と通読しても、一向に要領を得なかった。質問をしようと思っても相手が居ないのだからどうにもならない。困り果てていたところに、イタリア語講習会のポスターが目に入った。仙台でイタリアに関心を持っている人たちの「東北イタリア会」が、京都大学のイタリア文学の助手を招いて一週間、毎夕、講習会を開くというのだ。これぞ天の助け。さっそく主催者たちを訪ね、感謝の意を表しながら色々の雑務への協力を申し出た。そして、夏、受講者の受付を手伝いながら、6回の講習会を受けた。人から教えてもらう外国語の勉強はこんなに楽でこんなに分かりやすいものかと、感激の連続だった。最終日の夜、講師に感謝の夕食会が開かれた。文法書を読んで混乱し困惑していたのと、講習を受けての感激と感謝の言葉を述べると、あの本は読む程に分からなくなるよと笑いながら、別の、本屋では売られていない文法書を教えてくれた。その後すぐそれを取り寄せ、繰り返し読んだ。

私が文法書を読んで少し分かってきたと感激していた時、研究室の同年代の友人たちは、もう毎日、専門書を読んでいた。日本を研究している人は日本語の本を読むのだから楽なものだ。英米を専攻している人は中学生の時からなじんでいる英語で、独、仏を専攻している人でも、教養課程の時から習い始めた独語、仏語で読んでいく。しか

も英、独、仏語については、学部時代の専門書講読やゼミ、大学院マスター時代のゼミなどで、専門書を読む訓練をまさに専門の教授たちから受けている。私も英語と独語についてはそうした訓練を受けていたし、独語については助手になってイタリア語を始めてからも、毎週、指導教授の学部と大学院のゼミで専門書をテキストとして読んでいた。しかし、イタリア語については、たった6回の基礎文法講習会を受けただけで、他に何の訓練も受けていない。立ち遅れは、まさにどうしようもないものだった。

嘆いていても仕方がない。とにかく食らいついでみる他はない。しかしやはり歯がたたない。分からないことが続出するのに、それを尋ねる人がいない。いや、分かったと思った部分でも、はたして自分のその理解が正しいのかどうか確かめようがない。困った。本当に困った。そこで、イタリア語の本で英語や独語に訳されているものを選び、両者を対照しながら読む訓練を始めた。これはかなり有効だった。しかしそれでも、なぜ当のイタリア文が当の英文ないし独文になるのか理解できない、納得がいかない場合、やはり困った。そもそも、そうした複数の外国語を介してヨチヨチと読んでいくということ自体、忍耐の要ることだった。日、英、独、仏語の書を読んでいる周囲の友人たちを見ると、自分のノロノロ、ヨチヨチの毎日が、実に歯がゆかった。何もかもすべていやになった。

そんな時、ふと、小学校(5/6年)で習った杉田玄白のことが思い出された。『ターヘル・アナトミア』のたった一行が、幾人かの人と一日かけても読み解けなかったという話だ。さっそく文庫本の『蘭学事始』を買って読んだ。玄白は、眉毛の短い説明文が一日かかっても読めなかった、わずか一〜二寸(6/7センチ)の短い文の意味が分からないうちに日が暮れた、と苦心の日々を語りながら、日本で初めて人体解剖書を理解していく感激を淡々と綴っていた。(今度、本当に久しぶりに見て確かめたら、次のような文だった。)——「たとへば、眉といふものは目の上に生じたる毛なりと有るやう

なる一句、彷彿として、長き日の春の一日には明らめられず。日暮るまで考へ詰め、互にらみ合て、僅か一二寸の文章、一行も解し得る事ならぬことにて有りしなり」。……「凡そ一年余も過しぬれば、訳語も漸く増し、読むに随ひ自然と彼の国の事態も了解する様にて、後々は其章句の疎き所は、一日に十行も、其餘も、格別の労苦なく解し得るようになりたり」。

ずしりと重く響くものがあった。一言も無かった。やるしかない、再び文法書に、大型のリール・テープに、イタリア語→英語・イタリア語→独語の対照に向かった。だが、いやになって放り出し、せっかく覚えかけていたものまで忘れてしまうことも再三だった。それでも、市内にかつてイタリア語を学んだことがある人が居ると聞けば、まったく未知の人でも、自分に必要な専門書をもってすぐ駆けつけ、私とこのイタリア語の本を読んで下さいと頼み、相手に有無を言わず引っぱり出して「読書会」を開いた。それぞれの専門や仕事がある人たちに、何の報酬もお礼もあげず、お願いしますの一手で無理を聞き容れてもらった。何と勝手な、何と失礼なことをし続けたものかと、今は思う。

苦心の日々を「一年余も過ごし」てようやく「一日に十行も……解し得る」ようになった杉田玄白ら先駆者たちの苦勞から見れば、自分のやっていることなど何程のものでもないという思いが、その間、折りにふれて浮かんだ。なんかプラスになることがあるかもしれないと思えば、その後も迷わず突進した。イタリアに行った方がいいかもしれないと思立ち、先の「東北イタリア会」の人たちの推薦も得て、イタリア政府給費留学生試験を受けた。イタリア人と日本人の試験官から、イタリア語の先生は誰かと、無論イタリア語で質問されて、これまでの経過をイタリア語で答えた。口で答えたとういよりは心臓で答えたといった方がよかった。おそらく、田舎都市での独学の話が試験官の共感を呼んだのだろう。初年度は腕だめしで終わるかと思っていたのに、パスした。加えて、日本の文部省からイタリア往復の旅費も得ら

れた。初めて飛行機に乗った。そして着いたローマ大学でも、今ふり返ると、突進の連続だった。

あれからもうかなりの年月が過ぎた。初めにも書いたように、今、イタリア語が一番親しむ外国語になり、同時に、一番苦勞する外国語にもなっている。外国語というものはどうにもならないものだ、今もしばしば感じる。イタリア語というジャングルに迷い込んでいるようにすら感じる。ただ、自分のやっていることなどは苦勞のうちに入らないという思いは、今も心にある。また、あの学び始めの頃の仙台の人たちの無償のご好意とご協力には、今も本当に頭が下がる。杉田玄白の『蘭学事始』にも、今度久しぶりに読み返しても、ただただ頭が下がる。外国語を学ぶことで自分の世界が広がる楽しさは学ぶ苦勞にまさるものでもあることを、これらの人々とこの書のお陰で知ることができた。(2001. 10. 21)

私はなぜ韓国語にとりつかれたか

経営学部

田川 光照

韓国語の勉強をはじめてまもなく2年が経つ。実力は、自己診断でハングル能力検定試験の4級程度、いばれるものではない。勉強のきっかけは、ある共同研究の調査旅行で韓国へ行く機会があったことだが、その調査旅行が終わってからも、勉強を続けている。その理由は、なんとと言っても面白いからである。

まず、第一に私にとって非常に新鮮であるということがある。中学、高校と英語を勉強し、三十数年前に大学に入ってからフランス語を専門と

した。以後、必要に応じてドイツ語やスペイン語やイタリア語をかじったが、いずれもヨーロッパの言語で、アジアの言語の勉強はこれがほぼはじめてである——「ほぼ」というのは一度中国語をかじりかけたことがあるが、発音の難しさに1ヶ月ほどでギブアップしたからである。はじめてまともに勉強したアジアの言語である韓国語は、文法が日本語とそっくりである。語彙の面でも両言語とも漢語が多く入っており、共通する単語が多い。このために、発音面では日本語に比べて複雑で難しいとはいえ、韓国語は日本人にとって非常に勉強しやすい言語である。

ヨーロッパ言語を勉強する際には日本語の発想から離れる必要があるが、韓国語の勉強の場合はその必要がない。とはいえ、異なる言語であるから、日本語の発想から微妙にずれなければならない場合もしばしばある。たとえば、敬語は、韓国語の場合絶対敬語（身内の者についても敬語を用いる）であり、日本語の相対敬語の発想とは異なっている。こういったことは、日本語の成り立ちについてあらためて反省させてくれることになり、いわば、日本語のもっている普遍性と特殊性といったものをきめ細かく照らし出してくれることになるのである。

個々の表現においても、いろいろ考えさせられることがある。一例を挙げると、極度の事柄を表現するのに「死ぬ」という言葉が日本語でも韓国語でも同じように用いられる。たとえば、「寒くて死にそうだ」は韓国語でもまったく同じで

、「(「チュウォ・チュッケツソヨ」と言う。ところが、大変おいしいということを表す韓国語の比喩表現

、「(「トゥーリ・モッタガ・ハナガ・チュゴド・モルゲツソヨ」)に出会ったとき、私は腰が抜けるくらいびっくりしてしまった。直訳すると「二人で食べていて、一人が死んでも分からないだろう」となるが、どうみても、このような表現は日本語の発想からは出てこない。「これを食べることができたら死んでもよい」とか、「死ぬほどおいしい」とか言うことはできるが、日本語話者として